

保存の
はなしをしよう。

35 「画像」と作品

博物館や美術館では、所蔵作品を他館で企画される展覧会へ出品することがあります。また、当館で開催する展覧会へご出品をお願いすることもあります。そうして展覧会を豊かにしていくのですが、作品の出入りの折、出品する方と借用する側で、出品時と返却時に作品の状態に変わりがないことを確かめる作業があります。とくに、作品の傷みが進むかもしれないと思われるところは念入りに見ます。作品の輸送中や展示中の環境は、普段の作品が保存されている場所とは、どうしても変わるからです。

そのとき、お互いによく参考にするのが、写真です。よく撮れた写真にはよく状態が記録されていて、「ここですね。」「はい。」と画像と作品の両方を見ながら、両方で状態を確かめることがあります。

私が仕事を始めた頃には、写真はフィルムを使うカメラで撮っていて、現像液の温度管理がそれほど厳密ではないモノクロなら自分でできて当然と教えられ、練習しました。自分で撮影・現像・プリントができると、印刷物を作るためや作品の状態を記録するために必要な写真がすぐに手に入るからです。フィルムが大きければ、より細かなところまで写し取れ、作品の状態を記録するためにも役に立ちました。よく使ったのは「中判」と呼ばれるカメラで、フィルムの幅が60mmほどあり、画像の縦横の比率を変えられる便利なものです。

現在、当館にはフィルムの現像や印画紙への焼き付けのために必要な

「暗室」も設計時からありません。印刷にはより精密な画像が必要とされ、自分で撮影・現像・プリントをすることもなくなりました。しかし美術館での写真の用途には美しい印刷物を作る以外に、作品の状態を記録することにもあるのは変わりなく、1970（昭和45）年の開館以来、おそらく先輩学芸員の方々が撮影されたとわかるフィルムもしっかり保管されています。モノクロ、カラー、ネガフィルム、ポジフィルムの各種サイズのフィルムが、作品ごとに整理されています。

きちんとプロのカメラマンに撮影をお願いしたデジタル画像があるのなら、もう要らないのではないかとと思われるかもしれませんが、これらのフィルムには、撮影した時の作品の状態が写し取られています。時を追ってそれぞれを見ていけば、劣化がどのように進んでいったのかも判ります。写真も大事な資料です。

(植野比佐見)



いまの撮影の様子です。

いまでも保管している昔々のフィルムです。

MUSEUM CALENDAR

開館／9時30分～17時（入場は16時30分まで）
休館／毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）
*2026年4月1日（水）から5日（日）まで、空調改修工事のため休館

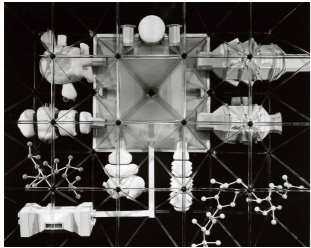
2025.4.12（土）～2026.3.31（火）
MOMAW コレクション
現代の美術



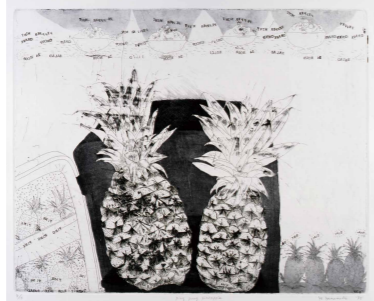
今村源《2008-5 さいのキノコII》
2008年 当館蔵

2026.2.14（土）～5.6（水・祝）
MOMAW コレクション 関西の戦後美術
2025年大阪・関西万博を契機に開催する「万博のレガシー」と併せて「関西の戦後美術」を特集します。保田龍門の1910年代の作品から始まり、戦後の大阪で龍門に学んだ福岡道雄、井上武吉、そして「具体」「デモクラート美術家協会」、今日活躍する作家までを紹介いたします。

2026.2.14（土）～5.6（水・休）
万博のレガシー—解体と再生、未完の営為を考える—
さまざまな作品や資料から万博の在り方を考える展覧会。大阪・関西万博での和歌山県出品も紹介します。



黒川紀章《EXPO'70 空中テーマ館模型写真》1968年
（撮影：大橋富夫）
黒川紀章建築都市設計事務所蔵



山本容子《Ping Pong Pineapple》
1977年 当館蔵 後期展示

メールマガジン Facebook X (旧 Twitter) ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ウェブサイトよりご登録いただけます。また Facebook や X (旧 Twitter) でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会 会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内カフェでの割引
7. ホテルアバローム紀の国、湯処むろべ、和歌山マリーナシティホテルでの割引



入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円
ミュージアムショップにて手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690 担当：中川

MOMA Wakayama

news

2026 n°126

2026 n°126 和歌山県立近代美術館ニュース



栗津潔《黒川紀章の作品 [ポスター]》1970年 美術出版社刊 個人蔵
「万博のレガシー—解体と再生、未完の営為を考える—」より



解体と再生の建築思想 — 万博とメタボリズムの射程

万博のレガシー — 解体と再生、未完の営為を考える —

2026年2月14日 - 5月6日

第2部「メタボリズムと共生 黒川紀章のEXPO'70を中心に」会場風景

はじめに

2025(令和7)年、大阪・関西万博が開催された。その終了を機に、和歌山県立近代美術館では「万博のレガシー — 解体と再生、未完の営為を考える —」がはじまった。「万博のレガシー」という言葉は、今日しばしば流行語のように消費されている。しかし、美術館という批評的な場において、広い意味での「レガシー＝遺産」を検証することは、万博が終わった今だからこそ意味をもつ営為であるように思われる。

本展は、第1部「万博と日本 グローバリズムの光と影」、第2部「メタボリズムと共生 黒川紀章のEXPO'70を中心に」の2部構成である。筆者は第2部を担当し、当館の設計者でもある黒川紀章の1970(昭和45)年の日本万国博覧会(以下、万博とする)における仕事を取り上げた。展示では、黒川が関わった3つのパヴィリオンを紹介したが、そのいずれもが「メタボリズム」、そして「カプセル」の理論を適用したものである。本稿では、その思想的背景と万博における実践として主に「空中テーマ館」について述べていきたい。

メタボリズムと黒川紀章、そして「カプセル宣言」

黒川紀章は1960年代より建築家として本格的に活動を始める。当時、東京大学大学院で丹下健三研究室に所属していた黒川は、「メタボリズム」という建築グループに参加していた。「メタボリズム」とは「新陳代謝」を意味する生物学的用語であり、日本から端を発した建築運動である。生命が成長し変化を繰り返すように、建築や都市もまた有機的にデザインされるべきであるという理念に基づいている。黒川の他に参加していたのは、評論家の川添登、建築家の菊竹清訓、槇文彦、大高正人、デザイナーの栗津潔、柴久庵憲司で、メンバーはいずれも20代から30代の若手であり、黒川は最年少の26歳だった。

1960(昭和35)年、東京で開催された世界デザイン会議に際し、彼らはグループのマニフェストともいえる『Metabolism/1960 — 都市への提案』*1

を発表した。ここで黒川は「空間都市」と題し、「農村都市計画」「キノコ型の家(K邸計画案)」「新東京計画」「垂直壁都市」という4つの都市計画を提示している。

その中の「農村都市計画」は、黒川の故郷である愛知県海部郡地方が伊勢湾台風で壊滅的な被害を受けたことがきっかけで計画された。黒川は「農村は農業を生産手段とする近代都市でなくてはならない」と述べ、空中にインフラストラクチャーを吊り下げた格子状のフレームを設けた。住居単位としては、キノコ型の家(K邸計画案)が考案され、増殖可能な都市構造が提示された。

また、同年、黒川は丹下研究室によるプロジェクト「東京計画1960」において交通システムを担当し、その後、自身の構想として「東京計画1961—Helix計画」と「霞ヶ浦計画」を発表した【図1】。両者は、共にDNAの二重螺旋構造をモデルとした未来都市構想である。「Helix計画」は日本橋から東京湾岸にかけて展開する超高層都市として、「霞ヶ浦計画」は茨城県霞ヶ浦湖上に浮かぶ環境共生型都市として提案され、螺旋状のメガストラクチャーにはリニア・エレベーターが組み込まれ、立体的な交通システムが構想されている。

このように黒川は、1960年代初頭の段階ですでに、構造体としてのフレームと可変的な居住単位とを階層的に構成する都市観を提示していたことが確認できる。1960年代を通じて黒川は、著書を通して、「プレファブ」や「カプセル」といった概念を提唱していく。そして、1969(昭和44)年刊行の『ホモ・モーベンスー都市と人間の未来』*2で、「カプセル宣言」を打ち立てた。

ここでは以下の8箇条が示されている。

- 第一条 カプセルとは、サイボーグアーキテクチャである
- 第二条 カプセルはホモ・モーベンスのための住まいである
- 第三条 カプセルは多様性社会を志向する



図1 第2部第1章「メタボリズムと黒川紀章」会場風景



図2 《お祭り広場》(撮影：大橋富夫)1970年

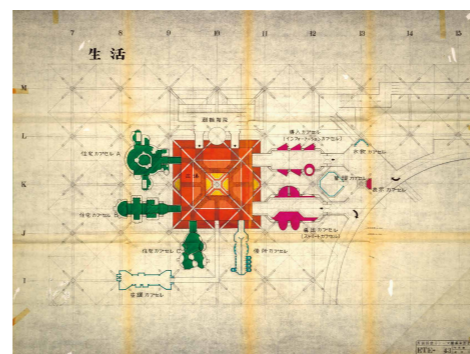


図3 黒川紀章《空中テーマ館基本計画「生活」平面図 1:100》1968年



図4 アレクセイ・グトノフ《渦巻き都市》、モシェ・サフディ《住宅都市》 画像提供：大阪府

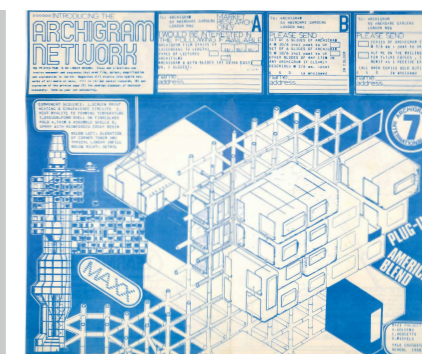


図5 アーキグラム《アーキグラム7 プラグインシティ》制作年不詳

- 第四条 カプセルは個人を中心とする新しい家庭像の確立を目指す
- 第五条 カプセルは故郷としてのメタボリスをもつ
- 第六条 カプセルは情報社会におけるフィードバック装置である
- 第七条 カプセルはプレファブ建築、すなわち工業化建築の究極的な存在である
- 第八条 カプセルは全体性を拒否し、体系的思想を拒否する

この宣言は単なる建築理論というより、社会的価値観への提言であったと言える。「カプセル」は旧来の価値体系に対する反価値的概念でもあり、「メタボリズム」における適応性を内包した思想でもあった*3。

万博という実践の場「空中テーマ館」

1960年代に構想されたメタボリズムの思想は、1970(昭和45)年の万博において大規模に展開されることとなる。黒川紀章は同万博で、2つの企業パヴィリオンと、万博のシンボルでもあった太陽の塔を擁するテーマ館【図2】における展示を手がけた。

テーマ館は、地下、地上、空中、3つの区分に分けられ、それぞれで過去、現在、未来がテーマとなっている。お祭り広場の上部にある大屋根は丹下健三が設計に携わり、黒川も建築アドバイザーとして参加していたようである。大屋根は、構造体であると同時に空間そのものでもあるスペースフレームによって構成されている。このスペースフレームは西洋でも構想されていたが実現には至らず、大阪万博において初めて大規模に実現

したものである。

大屋根部分の空中テーマ館は川添登が担当し、その補佐として黒川が内部空間設計を担った。黒川は基本計画として、大屋根にプラグインするカプセルを考案している【図3】。空中テーマ館には「宇宙」「人間」「世界」「生活」の4セッションが設けられ、展示構成は栗津潔が担当した。

本展第2部では、このうちとくに「生活」セッションに着目した。黒川紀章建築都市設計事務所所蔵資料の中に、調査の中で、同セッションに関係する資料がまとまって確認できたためである。「生活」セッションでは、日本を含む世界各国の前衛建築家による未来都市提案が提示された。この展示には黒川も参加しており、ほかにアーキグラム、ハンス・ホライン、ヨナ・フリードマン、アレクセイ・グトノフ、槇文彦、神谷宏治、ジャン・カルロ・デ・カルロ、クリストファー・アレグザンダー、モシェ・サフディらの参加が確認できる。

この展示のオファーにあたり、空中テーマ館の担当であった川添、槇、そして黒川が、アメリカとヨーロッパに赴き、建築家と直接交渉をおこなったという記録や写真も残っている。空中テーマ館の展示は、予算の制約もあり難航したが、黒川自身も海外の建築家らと手紙でやりとりを重ね、最終的に「未来」に対する都市提案が形となった。それぞれの提示したプロジェクトや黒川が収集した建築家らの資料からは、黒川との同時代性を見出すこともできる【図4、5】。

このセッションで黒川は住宅カプセル【図6】を提案し、原寸大モデルを展示した。黒川の住宅カプセルは大量生産を前提とし、中央コアに個別カ

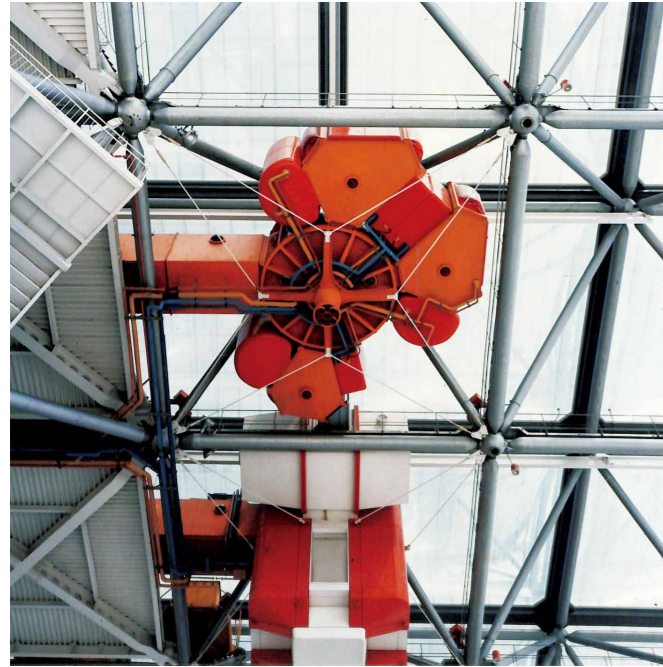


図6 黒川紀章《住宅カプセル》(撮影：大橋富夫) 1970年



図7 黒川紀章《住宅カプセル》(撮影：大橋富夫) 1970年

プセルを取り付ける構想であった。その思想的基盤には、もちろん1969(昭和44)年の「カプセル宣言」がある。さらに同年のアポロ11号月面着陸の影響も反映されてか、宇宙ステーションを想起させるイメージが与えられている。また、個人のスペースであるカプセル部分には、基本的機能に限定された空間ではあるが、毛足の長いファーを用いるなど、未来的でありながら高級感を備えた個人の空間が創出されていたことがわかる【図7】。

そしてこのセクションには黒川の「カプセル宣言」から制作された電子音楽が流されていたという。この音楽は一柳慧によるもので、1970年刊行の『黒川紀章の作品』【図8】に付属したレコードに「MUSIC FOR LIVING SPACE」として収録されている。グレゴリオ聖歌にのせて、黒川自身の声を素材とした電子音声、「カプセル宣言」を読み上げるといった構成であった。



図8 黒川紀章、デザイン：栗津潔『黒川紀章の作品』1970年 美術出版社／一柳慧「MUSIC FOR LIVING SPACE」(協力：京都大学電子工学部) 1970年



図9 田仲森太郎《中部カプセルタワービル 全体模型 1/30》2025年

おわりに

展覧会では、黒川紀章の万博での実践として、空中テーマ館に加え、タカラ・ビューティリオンや東芝IHI館についても展示し、その後の展開として、中銀カプセルタワービルも紹介している【図9】。いずれもカプセルとメガストラクチャーによって構成された建築であり、単位パーツの組み合わせによって増殖と拡張を可能とする。さらに接合部分を外してゆけば容易に解体できるよう設計されていた。

黒川は、メタボリズムには「増殖」「交換」「分裂」「破壊」という4つのプロセスがあると述べている*4。黒川の言葉によると、「破壊」とは今日の言葉でいえば「リサイクル」、すなわち循環を意味する。その意味において、万博は黒川にとって「メタボリズム」から端を発する思想の実験場であったと言える。そしてその適応性は、解体と再生を前提とする建築のあり方そのものにも見出すことができるのである。(芦高郁子)

- *1 編集：川添登、執筆：菊竹清訓、川添登、大高正人、榎文彦、黒川紀章『Metabolism/1960—都市への提案』、美術出版社、1960年
- *2 黒川紀章『ホモ・モーベンス—都市と人間の未来』、中央公論新社、1969年
- *3 「カプセル」の反価値的性質については、川添登が以下の論考で述べている。川添登「反価値としてのカプセル」『SD スペースデザイン』No.52、鹿島出版会、1969年3月
- *4 黒川紀章インタビュー、聞き手：五十嵐太郎+小田マサノリ「都市、万博、メタボリズム 破壊と再生のプログラム」『10+1』No.36、INAX 出版、2004年9月

*図2、図3、図5-図7は、黒川紀章建築都市設計事務所蔵
*図8、図9は、個人蔵



当館では毎年、友の会主催によるコンサートを開催しています。和歌山市在住の小寺香奈さん(ユーフォニアム)に依頼し、さらに菊池秀夫さん(クラリネット)、渡辺裕紀子さん(作曲家)をお招きして、美術館という空間とともに音を楽しんだ今年度の試みをここでは振り返ります。

階段踊り場での小寺さんの演奏から、おもむろにコンサートは始まりました。1階から天井までの吹き抜け空間にユーフォニアムの音が広がるなか、エレベーター内部から菊池さんの奏でるクラリネットの音色が聞こえてきます。1階から2階へと移動するエレベーターに観客の注目が集まりますが、あわせて2階テラス入口付近での小寺さんの演奏がさらにつながっていきます。場所を移動しながら重なりつつ響く演奏は、聴くことの体験の幅をより広げるものになりました。2階展示室では、「MOMAW コレクション 現代の美術」にて展示している、マーク・ロスコ(1903-1970)、フランク・ステラ(1936-2024)、クロード・ヴィアラ(1936-)の作品の魅力である多様な

色面や幾何学的構成や繰り返しのパターンなどと共鳴する実験的な楽曲が演奏されました。最後はホールへと移動し、渡辺さんの楽曲に観客も一緒に参加しました。プロジェクターから壁面に投影したさまざまな色に合わせて、各自がスマートフォンの、渡辺さんが指定するウェブサイトにアクセスし、変化する色と同じ色のボタンを押します。スマートフォンから7色ごとに発せられる異なる持続音と、ユーフォニアムとクラリネットの音色が次第に大きなうねりとなって、色彩と音とが連動しながら空間に響き変化していきました。

美術館でこそ体験できるコンサートとは何かと考えながら実践した初めての試みでしたが、今回のコンサートはその可能性を確かに感じるものでした。最後に、協働くださった3人の演者の皆さんに、そして参加していただいた観客の皆さんにあらためて感謝を伝えたいと思います。(奥村一郎)

プログラム

階段踊り場

ジャチント・シェルシ(イタリア、1905-1988)
マクソンガン(1976) / ユーフォニアム

エレベーター内

マルトン・イレシュ(ハンガリー、1975-)
三つの水彩画(2015) / クラリネット

2階テラス入口付近

デイヴィッド・ギリングハム(アメリカ、1947-)
ブルーレイクファンタジーズより / ユーフォニアム

2階展示室

トム・ジョンソン(アメリカ、1939-2024)
ラショナル・メロディーズ(1982)より1番 / クラリネット、ユーフォニアム

ナ・ソクジュ(韓国、1981-)
vkqzhs ポップコーン(2011) / クラリネット

松平頼暁(日本、1931-2023)
ディスタンス(2020) / クラリネット、ユーフォニアム

2階ホール

渡辺裕紀子(日本、1983-)
名前のない時間II 新作(世界初演、観客参加型の音楽作品) / クラリネット、ユーフォニアム、映像、観客の携帯電話



チラシ



戦後京都の前衛「パンリアル美術協会」

MOMAW コレクション 現代の美術 第4期
2025年9月12日-10月19日

第二次世界大戦の敗戦は旧来の日本の社会構造を根底から覆し、人々の暮らしの価値観や世界観の見直しを促しました。文化・芸術も例外ではなく、一般大衆の生活や時代の感覚から遊離した伝統的な日本画を否定する「日本画滅亡論」や「日本画第二芸術論」が唱えられ、日本画の枠組み自体を問い直す動きが活発化します。

戦後の美術界再編の激動のなか、京都画壇の本拠地でも、1940年代以降に前衛日本画運動を牽引する多くの団体が結成されました。現在、京都市京セラ美術館で開催中の特別展「日本画アヴァンギャルド KYOTO 1948-1970」(会期:2026年2月7日-5月6日)では、1948(昭和23)年結成の「創造美術」、1949(昭和24)年の「パンリアル美術協会」、1959(昭和34)年の「ケラ美術協会」を採り上げています。これら3つの団体の活動を通して、戦後京都で展開された前衛日本画運動が備えた批評精神や創造性を紐解こうとしています。当館では昨年、コレクション展示の一角で、和歌山県立近代美術館作品収集方針*1に掲げられている「パンリアル美術協会」について所蔵作品により各作家が試みた果敢な実験精神を紹介しました。ここでは、結成経緯や掲げた理念に重点を置き、同協会の特質を浮かび上がらせたいと思います*2。

1946(昭和21)年秋、第二次世界大戦末期に派兵された中国から復員して間もない山崎隆(1916-2004)と、勤労動員先で結核に罹患したため故郷福井で病気療養のち京都に戻ったばかりの三上誠(1919-1972)は大阪へ向かう途中の電車内で偶然再会しました。ともに京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学、以下絵専)で日本画を学んだ2人は、今後の活動を話し合う中で停滞する日本画壇を変革するためにも「何かやろう」という言葉を残して別れたといいます*3。当初は東京で活動している作家とも共同する構想をもっていました。が、連携がうまくいかず京都で独自の団体を結成することになりました。こうした紆余曲折を経て1947(昭和22)年7月、三上は勤労動員先で親しくしていた絵専の後輩、星野真吾(1923-1997)を通じて不動茂弥(1928-2016)ら若い作家たちを山崎に紹介し、新

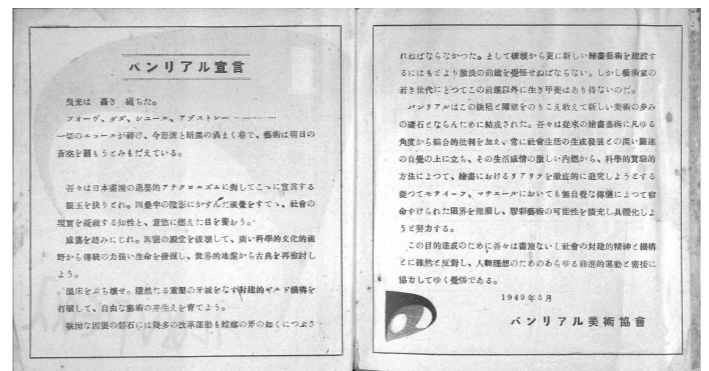
しい芸術運動の計画を話し合うグループをつくりました。数回の会合が重ねられたのち、山崎、三上、星野、不動、田中進(のち竜児、1927-2014)のほか洋画にも取り組んだ青山政吉(1920-1994)を含む6人の日本画家と、山崎が誘った2人の陶芸家、八木一夫(1918-1979)と鈴木治(1926-2001)を合わせた8名の作家が、1948年3月に「パンリアル」を結成しました。会の名称は、三上の提案により、現代を表現するという意味においてアブストラクト(抽象)も含む広義のリアリズムを表すことを期待して「パン(=汎)リアル」と命名されました。ジャンルを横断する戦前の総合芸術運動「歷程美術協会」*4に参画した経歴をもつ山崎の働きかけに応じて参加した八木と鈴木でしたが、同年丸善画廊での「パンリアル展」出品後、前衛陶芸グループ「走泥社」を結成したためパンリアルを離れます。さらに、当時、京都大学文学部に在籍していた研究者や学生らを研究会友として迎えて理論的研鑽にも取り組み、「膠彩芸術の可能性を拡充し具体化」することにより日本画の伝統的な材料である「膠」に象徴される日本文化自体の革新に挑む姿勢を鮮明にしていきます。そうした理念を明文化した先鋭的な宣言文「パンリアル宣言」【図版】を掲げ、日本画家11名*5により1949年5月、「パンリアル美術協会」が結成されました。宣言文は会員の意見を三上が集約して草案をつくり、成文化の中核を担った研究会友の清水純一(1924-1988、イタリア・ルネサンス文学・哲学史、当時京都大学大学院生、のち同大学名誉教授)が完成させたものです。

パンリアル美術協会の作家たちは新たな日本画の在り方を探究し、従来の素材・技法・モチーフ・形式をこえた実験的な制作をそれぞれが試みながら多彩に展開しました。蠟を塗った上から引っかき、力強い線描を交錯させた三上、全身あるいは特定の部位を支持体に押し付ける「人拓」による作品を発表した星野、目の粗い麻布であるドンゴロスによる表現を見せた大野倣嵩(1922-2002)、日本画の伝統的画題である鳥をモチーフに制作を続け、1960年前後より紙粘土という可塑性な素材を用いることで立体性を備えた表現に進んだ下村良之介(1923-1998)、新聞の活

版印刷に用いる型紙を加工して貼り付けるコラージュを展開した野村耕(1927-1991)、焼杉、セメント、砂、古い浄瑠璃本等によるコラージュ表現から、日本画の特質を「描線・色面・記号性」に収斂させた不動ら、各作家が従来の日本画の基盤であった美意識や技法の制約を破り、新鮮な感覚で力強いマティエールを生み出し、新たな造形感覚によって表現の地平を切り拓きました。

パンリアル美術協会は、結成後程なく日本画のみならず、油彩、彫刻、写真など他分野を横断する展開もみせました。創立の中心にいた三上の病死や理論的擁護者であった美術史家の上野照夫(1907-1976、インド美術史、京都大学名誉教授)の死去、創立会員の退会など数々の節目を経て2020(令和2)年3月の解散までの間、社会情勢の変遷とともに様々に異なった様相を示しました。

本展では、当館が所蔵する限られた絵画作品による展示となりましたが、戦後美術界に新風を吹き込んだ草創期の作家の力作を紹介し今日的意義も喚起する機会としました。戦前の前衛日本画団体である歷程美術



図版 1949年5月に公表された「パンリアル宣言」(原典:『第1回パンリアル展出品目録』1949年5月)、『戦後日本画の革新運動 パンリアル創世記展』図録(西宮市大谷記念美術館、1998年)より引用

協会の精神を受け継ぎつつ、戦後関西で生まれたこの革新運動について、今後とも既存の日本画という概念を超えたより大きな美術の枠組みでの見直しも必要となってくるでしょう。(田村允英)

- *1 当館の「美術作品の収集基本方針」には「(2) 国内外の近・現代美術の美術作品を積極的に収集する。」と明記されています。このことから戦後関西で活動した重要な美術団体も対象とし、「和歌山県立近代美術館作品収集方針」には「(8) 戦後美術 ア パンリアル美術協会」が記載されています。詳しくは当館が発行している各年度の年報をご参照ください。
- *2 パンリアル美術協会の結成経緯や理念については創立メンバーの不動茂弥の著作『彼者誰時の肖像 —パンリアル美術協会結成への胎動』1988年、私家版のほか、『「日本画」の前衛:1938-1949』2010年、京都国立近代美術館他、山野英剛『「近代美術」再考-前衛・モダニズム・近代美術館;第1集 カンディンスキーと日本の前衛:版画・抽象・音楽』2025年、東信堂を参照しました。
- *3 同上。山崎の証言。ただし、三上は同年10月21日に行われた絵専の二条城見学会で再会したと語っています。いずれにせよ、二人はこの時期に再会し、今後のことを話し合ったと考えられます。
- *4 岩橋英遠、田口壮、馬場不二、船田玉樹、丸木位里、山岡良文ら日本画家だけでなく、洋画家の津田正周、自由美術協会所属の版画家・浜口陽三、美術評論家の四宮潤一、瀧口修造らにより1938(昭和13)年4月に結成されました。「歷程」の名は瀧口によるもので、シンボルマークのデザインも瀧口が行いました。結成当初、出品作品は日本画に限られていましたが、のちに写真、陶芸、刺繍、生け花など多彩なジャンルの作家が参加するようになり、総合的な芸術表現を標榜するかのような団体へと変容していきました。東京で開かれた研究会には、福澤一郎や長谷川三郎、村井正誠、小野里利信らも参加しています。しかし、戦時体制下で美術団体の統廃合や画材の統制が厳格化される過程で、同協会も次第に時局へ迎合する展覧会へと性格を変えることとなります。1943(昭和18)年2月には穏当な「日本作家協会」に統合され消滅しました。(毎日新聞社編『昭和の美術:日本画・洋画・彫刻・工芸 第2巻(11年~20年)』1990年、毎日新聞社)戦後まもなく山崎の声がけで結成されたパンリアルは、歷程の理念の再興を意図したグループでもありました。
- *5 同協会の第1回展では「パンリアル」の結成メンバーでもある山崎、三上、星野、不動、田中に加えて、大野、下村、松井章、小郷良一、佐藤勝彦、鈴木吉雄ら11名が会員となりました。また、研究会友として清水、今居(対馬)忠、川勝義雄、高原富安、村田敬次郎、吉岡雅也の5名が参加しています。